



アムスのじやが芋

一九七六年二月二十日 初版印刷

一九七六年二月二十五日 初版発行

定価 九八〇円

著者 黒岩重吾

装幀者 後藤市三

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五—二〇
郵便番号 一〇一

電話 出版部 二三〇—六三六—
販売部 二三〇—六一七一

印刷所 株式会社常磐印刷所

製本所 中央精版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本はお取替えいたします

黒岩重吾

己の
力が
半

集英社

アムスのじゃが芋

セ

裏窓の顔

三七

薄暮の笛

三八

残月の宿

二三

冬の窓と春の陽

一四五

釣堀の顔

一六五

潮騒のある湖

一九二

日溜の草

二四二

掲載誌一覧

アムスのじゃが芋 小説新潮 昭和五十年七月号

裏窓の顔 小説現代 昭和五十年九月号

薄暮の笛 小説現代 昭和五十年五月号

残月の宿 小説新潮 昭和五十年十月号

冬の窓と春の陽 小説新潮 昭和五十年四月号

釣堀の顔 オール読物 昭和五十年八月号

潮騒のある湖 小説サンデー毎日 昭和五十年五月号

日溜の草 オール読物 昭和五十年十一月号

アムスのじやが芋

アムスのじゃが芋

矢城恭太がアンニイと知り合い、惚れられたのは、飾り窓の女、で有名な、アムステルダム近くの大衆レストランである。十九歳のアンニイは、そのレストランのウェイтрレスだった。

恭太は昨年まで、コペンハーゲンの日本料亭に勤めていたが、石油ショック以来、客足が落ち、潰れたので、仕方なく、渡り鳥のように欧州各国を転々とするようになったのだ。ヒッピーの群れに入り、食うや食わずの生活を送ったこともあるし、パリでは、ぼん引の真似事もした。また、オランダでは、手捌きの器用さを買われて、プライベイトカジノのディラーにもなった。

そのおかげで、一食五六百円の大衆レストランで食事出来るようになったのである。

だが、金は全く溜まらなかった。そのカジノはアムステルダムにあったが、マスターは典型的なダッチで、恭太のチップまで取り上げてしまう。食わしてやっているだけでも有難く思え、といった態度だった。

実際、あの石油ショックは、欧州諸国に衝撃を与え、失業率が増え、放浪している日本人など、到底、職にありつけない。

アムステルダム運河の近くに、ヒッピーの溜り場があり、彼等は無料に近い安宿でごろごろしているが、ヒッピー仲間の女達が身体を売って各グループを食わせている状態だった。身体を売るといっ

ても、大抵は籠抜けで、旨く金だけ握って、逃げ戻って来るのだが、その相手が、アメリカや日本の観光客なので、先ず泣き寝入りで、警察に訴えたりしない。

飾り窓の女達を興味深げに眺めて歩いているおのぼりさんの観光客が鳴になる。

一時は恭太も、彼等の溜り場で寝起きしていたのだ。

ぼん引役のヒッピーが、運河に掛った橋の上で、鳴を見付けると、早速、つき纏う。

飾り窓の女は、あそこが腐っていて、遊んだら酷い目に遭う。それよりも、デパートガールと遊んでみないか、と持ちかけるのだった。幾ら鳴でも、なかなか信用しないが、十七八歳の女のヒッピーが素人臭い恰好をして、項垂^{くた}れているのを見ると、なかには引掛る者もいるのだった。

不景気で物価は値上がりし、普通に働いても、なかなか暮してゆけない、としおらしくいうと、つい信用してしまう。

そして鳴達は決ったように、自分の泊っているホテルに来るか、という。

「彼女は本物のデパートガールです、安ホテルと契約しているような淫売じゃありませんよ、そりゃ、良いホテルなら喜んで行きます」

それで鳴は完全に信用し、俯いて如何にも恥ずかしそうな恰好をしている若いヒッピー女を連れて、ホテルに行き、金を渡して、見事に籠抜けされる、というわけだ。

日本人の鳴には、日本のヒッピーが、アメリカ人には、アメリカのヒッピーがぼん引の役をするが、不思議に引掛る率は五分五分だった。

恭太はプライベイトカジノのディーラーになって以来、なるべく、ヒッピー達と顔を合わせないようになっている。それで、ヒッピー達が寄りつけない、アンニイの店に行くようにしていたのだ。ヒッピ

ーといっても、昔の自由を謳歌し、平和を愛するヒッピーと異なり、今は犯罪者の集団と余り変らない。

ことに、全く仕事口がなく陰湿な性格の玉口は、良い仕事を見付けた恭太を憎んでいた。

恭太はアンニイと英語で喋るが、アンニイの英語は日常会話程度で、一寸難かしい話になると、もう駄目である。

アンニイは身長は小柄で一六二^{センチ}だった。左頬の雀斑^{そばかす}がまだ稚い感じで、肌が柔らかい。

親しくなったのは、恭太が何時もじゃが芋とハンバーグを注文するからだった。恭太が、同じものを注文するのは、ハンバーグのせいではなくじゃが芋が旨いからだだった。

それに油揚げの豆も旨い。

だから恭太はアンニイに、じゃが芋と豆を多く入れてくれ、と注文する。アンニイが、たまには別なものを食べたら、といっても、恭太は変えなかった。

恭太の故郷は岡山の山村だが、じゃが芋がよく穫^とれる。米よりもじゃが芋で育ったような恭太だった。望郷などというセンチな感情はとくに忘れているが、兎に角、アンニイの店のじゃが芋は旨かった。

そんな或る日、玉口達、ヒッピー仲間がアンニイの店にやって来て恭太と出会ったのだ。

多分、鴨から、かなりの金を捲きあげたのだろう、彼等は威勢が良かった。

先ず玉口が恭太の悪口をいい、他のヒッピーを煽動した。玉口一人なら、絶対負けないが、相手は男性三人に、女性二人だ。ことに男性のうちアメリカのヒッピーは身長一八五^{センチ}、体重は九〇キロぐらいである。

恭太はアンニイを呼ぶと、外に出て喧嘩になりそうだったら、直ぐパトカーを呼んでくれ、といった。

カジノが恭太を備っているのは正式ではないから、恭太は職業を告げられない。

アンニイは、吃驚して、喧嘩などせず、早く逃げたらい、といった。

「心配は要らない、喧嘩をしたら、殺されるからね、擲られているだけだよ」

恭太が店を出ると、逃げるのか、と玉口が叫び、ヒッピー達は店の外で、恭太を取り巻いた。アンニイが、顔を引込めたのは、電話を掛けに行ったのだろう。

「どうにでもしろよ」

そういうと恭太は頭をかかえ道に俯伏せになった。女のヒッピーも昂奮し、ヒールで蹴って来る。一番こたえるのは脇腹を蹴られた時だ。息が出来なくなり、嘔吐しそうになる。だが、頭を蔽っている腕だけは、離せなかった。頭を蹴られると生命が危ない。

早くパトカーが来ないか、と薄れ行く意識の中で思っていると、アンニイが、メガホンを持ち出し、警察に電話したよ、と叫んだ。

途端にヒッピー達は、まさに蜘蛛の子を散らしたように逃げ去った。

アンニイが何故メガホンを持っているか、考える余裕などなかったが、恭太は路上に横たわりながら、たくましい女だな、とぼんやり思った。そして、アンニイがしゃがみ込み、雀斑の顔が眼の上に近付いた時、何時も、多少汗臭い、と思う、腋臭とまでは行かない、一寸鼻を刺す濃い中国茶のような匂いが、何故か香ばしく感じられるのだった。

「大丈夫、ケウタ」

とアンニイは心配そうにいった。

アンニイは、恭太をケウタ、と呼ぶ。路上には群集が二人を取り巻いたが、ただ、好奇の眼で眺めるだけだ。

「警察に知らせたか」

「ええ、直ぐ知らせたわ」

これで折角の職も失うことになるか、と恭太は思い、苦痛に顔をしかめた。遠くでパトカーのサイレンが聞えて来た。

恭太は相変らず心配そうに覗き込んでいるアンニイの頬を撫でた。

パトカーが近付いて来た。こんな時の用意に恭太は一週間前の日付の入ったベルギーの鉄道の切符を用意していた。

恭太が一晩留められただけで釈放されたのは、その切符のおかげだった。

アムステルダムに、何カ月もいたことがあれば、一晩や二晩の拘留では済まない。

アンニイの機転のおかげで、怪我は浅かったが三日間は身体が動かずプライベイトカジノに出られなかった。カジノに勤めてから、安いが兎も角アパートメントに住めるようになったのである。一カ月の家賃は前払いなので、何とか、一カ月ぐらいはやってゆけるが、それから先の生活の見通しは全くなかった。

アパートメントの住所を教えてあったので、顔を見せないのも、心配したアンニイが、ビニール袋一杯に食糧品を詰め込んでやって来た。

身体の節々は痛むが、左右に身体を動かしたり屈伸運動が出来るので、骨に鱗おびは入っていないよう

だった。

アンニイの汗の匂いを嗅いだ時、恭太は欲望を覚えた。恭太は二人で食事をしよう、といい、アンニイは早速昼食の用意を始めた。

アンニイのレストランは、日本でいえば、池袋の大衆食堂、といったところだ。

張り切れそうな脰脰うぐちばさぎを眺めていると、生活力の旺盛さが感じられる。メガホンで怒鳴りつけた感じなど、八百屋の店先で大安売りを宣伝している下街娘のたくましさだ。

だが、アンニイの容貌は民族衣裳でも着たなら、なかなか似合いそうで、そんなに悪くはない。

アンニイが運んで来た食糧の中にじゃが芋があったのは嬉しかった。この三日間、固いパンばかり齧っていたので、恭太はじゃが芋にも飢えていた。久し振りの御馳走に、恭太は満腹になるまで食べた。無我夢中で食べ終り、コーヒーを飲むと、アンニイの雀斑が趣味を帯びて美しく見えた。

今日は休日なので来てくれたのだろうが、デートする相手がないところを見ると、恋人はいない。アンニイの年齢なら、恋人が出来れば、暇があればひっついていだろう。それを思うと、恭太は手を出し難い。

空は気持ちよく晴れ、部屋の中にいるのが勿体ないようだった。だが、こういう状態での満腹感はある欲望をそそる。アンニイも、それを感じているのか、何となく待ち焦れているようだ。

十九歳というが、当然、男性経験はあるだろう。ヨーロッパの女性は、こういう場合、日本の女性より積極的である。

アンニイは窓辺によると恭太を呼んだ。

「可愛い鳥がいるわ」

アンニイが指差したところは隣の手作りのベランダで、鉢植の花が美しい。その鉢のところに、何の鳥か黒と白の鳥が動き廻っている。狭い窓なので、アンニイの熱い身体が触れ、あの汗臭い匂いが、恭太の欲望を刺戟した。恭太が腕をアンニイの背に廻すと待っていたように口を押しつけて来た。

アンニイの身体は想像以上に肉が厚く、身体全体で押して来られると、これが女の身体なんだな、と恭太は今更のように感嘆した。オランダの女は、確かに余りスマートではないが、肉感的である。

アンニイは確かに何人かの男を経験していた。指の爪先での愛撫の仕方など、まるでベテランの娼婦のようだった。

恭太は少しがっかりもしたが、責任を感じなくてもいい、と安心し、欲望が奔放に爆発して、陽が落ちるまで、何度もお互いの身体をむさぼり合った。

こうして、アンニイは、恭太の女になったのだ。アンニイの話によれば、父親は船員で、めったに帰らない。一年のうち一カ月家に居れば良い方で、帰って来ても酒浸りだった。当然、母親はそんな夫に愛想をつかし、男をつくったが、長続きせず、男出入りが激しい。アムステルダムディスコティックの儲われママをしている、という。

店の名前を聞いて、行ったことのある店だ、と思った。ライブショウをやっている店の隣で、船員や黒人の集まる店である。

アンニイが男を知ったのは十五歳で、これまで関係した男性は十人以上いるらしい。

好きになると夢中になる方だ、とアンニイはいう。その通りで、レストランが終ると毎日のように恭太の部屋にやって来る。

恭太の肌を撫でながら、ケウタの肌は、これまでのどの男よりも柔らかくて美しい、と、まるで、